



喫茶室

◆和歌山県由良町は、紀伊半島のほぼ中央、紀伊水道に面した小さな漁業の町。平成11年度から漁業集落排水4処理区の整備に意欲的に取り組み、中心部の下水道事業と合わせ、25年度にはほぼ全町の普及整備が整う見通しとなった。「地域格差を無くし、漁村にも快適な暮らしを」との思いから、厳しい財政や人員体制の中、これら污水整備事業を長年引っ張ってきたのが、同町上下水道課工務班の峰岩敏彦班長だ。「魚釣りが趣味で、だいたい全国の港を釣って歩いたのですが、最近、磯に立って痛感するのが、海藻が消え魚や貝が減る『磯焼け』です。家庭排水も大きな原因なのでしょう」と危惧を覗かせる氏。「目の前の海で漁が成り立たなくなり、高齢の漁師がやむなく、遠い海まで出なければならなくなる。言い方は良くないですが、『自分で自分の首を絞めている』状況です。そんな事態を解消するためにも、漁村集落こそ積極的に污水整備の推進を」と訴えかける。

◆最近ではテレビ出演や講演、執筆依頼など、大忙しのGWJ・吉村和就氏だが、霞ヶ関・虎ノ門界限に来る機会があると、気さくに立ち寄ってくれる。フットワークの良さや情報収集を欠かさない姿勢に、いつも頭が下がる。「下水道予算が少なくなって、一方で膨大な維持管理・更新費用が必要になっている。事業の一部にPPPを導入せざるを得なくなると思われるが、そうした事例は出てきていませんか」。また、「コニカミノルタから講演依頼があるけれど、水はやっているの」と単刀直入に訊いてくる。先だつてのNHKクローズアップ現代で取り上げられた「中国水ビジネスを狙え」の視聴率は12.1%と、すこぶる高かったため続く企画が舞い込んできている」とも。多くの講演や原稿執筆を同時にこなしていくには、日ごろの地道な情報収集が欠かせない。「同じような話をしたくないから、新しい知識や情報を仕込む。これが案外、大変です」。氏の大きなカバンの中には、様々な資料がファイルされていた。



東北関東大震災

取材NOTEから

◇3月11日午後、未曾有の激震が東日本地域を襲った。報道映像が映し出したのは、穏やかな町並みを大津波と大火が容赦なく呑み込む阿鼻叫喚の地獄絵。太平洋沿岸の多くの町が、大都市も小さな漁村も、泥と瓦礫の中に跡形なく消えた。小石を積み上げるように、地道に整備に取り組んできた下水道施設も、関係者の積年の思いや努力も、一瞬にして無に帰してしまった。日ごろ下水道に関わる報道に従事する中で、その意義・重要性を認識してきたつもりも、あまりに呆気ないその結末には、空虚感・無力感とともに「これじゃ下水道どころでは

…」と思考停止に陥ってしまう。だが考えてみると、ニュースで専ら伝えられる壊滅地域の背後では、その何倍もの町や集落が、日常生活を辛うじて維持しつつ下水道の早期復旧を待っているはず。また、被災者が身を寄せ合う避難所では、水・食料などとともに、快適なトイレ環境が切望されている。沈んだ気持ちを奮い立たせ、下水道界一丸となって、それぞれが全力を注ごう。瓦礫の山から人を助け出すことはできないが、我々に今できることが確かにある。この場を借りて、被災地域の方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興を切に祈る。(Y)